34 メニューにない料理

今から百年ほど前のお話です。石川県出身の北橋茂男さんが大阪で洋食屋さんを開きました。北橋さんが作る料理は、どれもおいしく、それに安いので大人気でした。

お店の近所に住む男の人も、お客さんの一人です。その男の人が注文するのは、いつもオムレツとライスです。きのうも、その前の日も、オムレツとライス。そんな男の人のことが、あるとき北橋さんは気になりました。北橋さんは、思い切ってその人にたずねてみました。

「お客様、お待たせしました。オムレツとライスです。失礼ですが、なぜいつもオムレツとライスを注文されるのですか。おこのみの味つけにもできますが。もしかして、他の料理はお口に合いませんか。」

「とんでもない。ここの料理はどれもおいしいって、ひょうばんですよ。わたしも他の料理を食べてみたい。でも、わたしは昔からいがい思くて。このお店で食べられる物は、やわらかくていにやさしいオムレツになってしまうのです。」

「そうだったのですか……。」

北橋さんは、お皿の上にあるオムレツを見つめたまま、だまってしまいました。

その夜、北橋さんは、ふとんに入ってもなかなかねむれません。男の人の言葉が頭にうかんできます。夜中に起き出した北橋さんは、フライパンかた手に料理を始めました。

・たまご　・ごはん　・やわらかくていにやさしい物
・えいようのある物

（あの人はどんな料理をのぞんでいるのだろう。）

男の人の顔を思いうかべながら、フライパンをふってみました。しかし、思ったようにはうまくいきません。何度も何度もしっぱいして。

「できた！」

料理がかんせいしたときには、すっかり朝になっていました。

次の日もその男の人は、オムレツとライスを注文しました。

「ぜひ、お客様に食べていただきたい料理があるのです。」

と言って、北橋さんは調理場に向かいました。
出てきた料理を見て、男の人は、びっくりしました。いつも食べてい
たオムレツとライスではありません。
「どうぞ、めしあがってください。」
男の人は、その不思議な料理を一口食べてみました。
ケチャップ味のごはんと、とろりとしたたまごが合わさった、や
わらかくやさしい味が口の中いっぱいに広がりました。
「おいしい！」

思わずさけんだ男の人の声を聞いて、心配
そうに様子を見ていた北橋さんの顔がぱっと明るくなりました。
「それはよかった。やわらかい物しか食べられないと聞いて、これな
らどうかと考えてみたんです。」
「わざわざわたしのために？　これは何という料理なんですか。」
北橋さんはとっさに、
「オムレツとライスを合わせたので、『オムライス』です。メニュー
にない料理ですが、お客様によろこんでいただけて、うれしいです。」

と、にっこりわらって答えました。
「なるほど、オムレツとライスでオムライスか。とってもいい名前で
すね。それに、すごくおいしい。」
男の人がえがおでオムライスを食べるすがたを見て、北橋さんのつ
かれもふきとびました。
「いらっしゃいませ！」
今日もあの男の人がお店にやってきます。
「マスター、オムライス一つ！」
「かしこまりました！」
元気な声が店中にひびいています。

（文　石川宏千花　絵　ふるさとがはぐくむ　どうぶつ）